

令和六年度 卒業式 式辞

能登穴水町に暖かな日差しが降り注ぐ今日の良き日、穴水町長、吉村光輝様をはじめ、多くの来賓の皆様と保護者の皆様のご臨席のもと、「第 76 回卒業証書授与式」を挙行できますことに心から喜びを感じます。

保護者の皆様、本日は誠におめでとうございます。小中高の 12 年間、それぞれの成長に寄り添いながら、今このようにたくましく成長されたお子様の姿にさぞや感慨深いものがあろうかと存じます。

そして今、卒業証書を手にされた 33 名の卒業生のみなさん、卒業おめでとうございます。本校での 3 年間の課程を修了した充実感と、新生活への期待を胸にしたみなさんに、心から幸多かれとお祈りします。

我々は令和六年元日の能登半島地震の被災から、多くの試練を乗り越えてきました。3 月 30 日に登校坂が復旧、校舎一ヵ所に通水し、4 月より本校由比ヶ丘校舎で教育活動を再開できたことは、多くの人たちのご支援と励ましの声に支えられたからこそです。我々は感謝の気持ちを持続けなければなりません。と同時に、負けない強さを持って前に進み続けなければなりません。

今年度、本校は「復興元年」を合言葉に「再生」に向けスタートしました。卒業生のみなさんは、最上級生としての役割を十分に果たしてくれました。

穴水町と連携をはかりながら、5 月、全校生徒が仮設住宅の表札作りに取り組みました。

7 月、長谷部祭り代替イベント「復興団結～希望の灯り～」には、書道ガールズによるパフォーマンスとプラスバンド部による穴水中学校との合同演奏会でステージ出演しました。また、穴水高校ブースでは干し椎茸や地元採れ野菜の販売を行い、復興マルシェでは多くの生徒たちがボランティアとして加わり、出店の販売補助や商品運びなどを行いました。

夏の高校野球石川大会では、昨年に続き全校応援を実施し、2 年ぶりの単独チームで戦った選手とスタンドが一体となりました。被災を乗り越えて練習してきたこれまでの取り組みと、この試合で奮闘した姿が評価され、主将の東野魁仁くんが第 106 回夏の甲子園大会開会式の先導役に抜擢されました。大役を見事に果たし、堂々と行進する姿は能登に元気を与えてくれました。

このような、本校生徒の活躍は、「小さくてもきらりと光る穴水高校」を地域の皆さんに知ってもらう良い機会となり、同時に地域に元気を与える存在となっています。

そして、8 月 31 日の穴高祭。制約のある施設の中で、一日のみの開催となりました。調理室が使えない中で、各クラスが工夫を凝らした模擬店やゲームコーナー等で来校者をもてなし、保護者が手配してくれたキッチンカーも大盛況でした。また、青春応援団「我無沙羅」によるパフォーマンスや、白井貴子さんと全校生徒で歌った「明日という名の種をまこう」は、感動的なフィナーレとなって穴高祭は幕を閉じました。生徒会執行部をはじめとする 3 年生全員の熱い思いが、1, 2 年生をリードし、全校生徒が一丸となって穴高祭を成功させたと思います。この素晴らしい経験をいつまでも忘れないでください。

さて、先日アメリカ野球殿堂は2025年の殿堂入りメンバーを発表し、イチロー氏が日本人で初めて選手されました。イチロー氏は日米通算4367安打を放ち、引退後も歩みを止めず、日本のプロ野球とアメリカメジャーリーグで、28年間にわたって活躍したレジェンドです。

殿堂入りの野手では初となる満票選出に、わずか1票足らなかった直後の会見でイチロー氏は、

「すごくよかったです。」

「色んなことが足りない、人って。それを自分なりの完璧を追い求めて進んでいくのが人生だと思うんですよね。不完全であるというのはいいなって。生きていく上で、不完全だから進もうとできるわけで、そういうことを改めて考えさせられる。見つめ合える。そこに向き合えるというのはよかったです」とコメントしました。

卒業生の皆さん、みなさんは成長過程にあります。不完全だからこそ、まだまだ余力を残しています。これからのみなさんには無限の可能性があります。ぜひ、それぞれの夢を持ってこれから的人生を歩んで行ってください。私たちはいつまでもみなさんを応援しています。

みなさんは今日、穴水高校を巣立ちます。令和8年度、本校は創立80周年を迎ますが、その時には、みなさんも8千人を超える本校同窓会の一員として、母校を支えお祝いしてください。

結びになりますが、この3年間、本校の教育活動にご理解とご協力を賜った保護者の皆様と、地域の方々に厚く御礼申し上げるとともに、本日の門出を祝福いただきましたことに、心から感謝申し上げ、式辞といたします。

令和7年3月1日

石川県立穴水高等学校
校長 島崎 康一